

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第338号	氏名	三浦 大介
<p>[ 論文題名 ] Influence of preoperative serum creatinine level and intraoperative volume of contrast medium on the risk of acute kidney injury after transfemoral transcatheter aortic valve implantation: a retrospective observational study.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 BMC Research Notes 12:484:2019</p> <p>著者名 Daisuke Miura, Yasutaka Yamada, Shinichiro Kusaba, Eijiro Nogami, Junji Yunoki, Yoshiko Sakamoto, Yutaka Hikichi, Koichi Node, Yoshiro Sakaguchi</p> <p>[ 要 旨 ] 【研究の目的】大腿動脈アプローチ経カテーテル的大動脈弁移植術 (TF-TAVI) 後の急性腎障害 (AKI) の発生に与える血清クレアチニン値 (SCr) と術中の造影剤使用量 (CMV) の影響について検討を行った。 【方法】2014年3月から2018年3月までに佐賀大学医学部附属病院でTAVIを行った100例のリスク因子について後方視的に検討を行った。AKIの診断はVARC-2定義に基づいて行った。 【結果】100人の患者がTAVIを受け、その内TF-TAVIを受けた81人がこの研究に登録された。81例のうち、AKIは7人(8.6%)、非AKIは74人(91.4%)であった。SCr、CMVはAKI群で有意に高く (P&lt;0.05)、eGFRはAKI群で有意に低かった (P&lt;0.05)。CMV×SCr/BWは、AKI群で有意に高かった (P&lt;0.01)。CMV×SCr/BWのAUCは0.914で、カットオフ値は2.99であった。 【考察】過去の研究ではTAVI後のAKIの危険因子としてのCMVには定まった見解がなかった。本研究ではこれまでAKIの危険因子とされてきた心尖部アプローチのTAVIを除外し、さらに、過去の研究において統一されていなかったAKIの診断基準にVARC-2定義を用いて検討することでCMVがAKIの危険因子であることを明らかにすることができた。さらにCMV×SCr/BWを用いることで体格、腎機能に応じて術前に適切な造影剤使用量を定めることが可能であると考えられた。 【結論】CMV、SCr、およびeGFRがTF-TAVI後のAKIの危険因子であり、CMV×SCr/BW値&gt;2.99がAKIの予測因子であることを示唆している。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

## 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ ㉔	第 339 号	氏 名	久田 祥雄
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Mobile medical services and experiential learning in community-based clinical clerkships enhancing medical students' positive perceptions of community healthcare. 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Rural Medicine, 14 巻 2 号, 216-221, 2019 年 著者名 Yoshio Hisata, Yuta Sakanishi, Kazuya Kurogi, Akihiko Ogushi, Norio Fukumori, Takashi Sugioka.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>背景</b> 地域医療実習は医学生の地域志向性を高めるが、具体的にどの体験学習が地域志向性を高めるか検討した報告は少ない。</p> <p><b>目的</b> 地域医療実習の中で医学生の地域志向性の向上に寄与する体験学習を探索する。</p> <p><b>方法</b> 2015 年から 17 年にかけて、医学科 6 年生全員に地域医療実習前後で質問紙調査を行った。地域志向性は学生の地域医療に対するやりがいと自信を VAS スケールで測定し、前後で比較した。実習での体験学習は、外来診療、病棟業務、訪問診療・往診、訪問看護・介護、デイサービス、リハビリ、健診活動、予防接種、健康教育、巡回診療、時間外診療、救急医療、介護施設の 13 項目について「体験した」「見学のみ」「実施しなかった」で回答を得、「体験した」とそれ以外とで 2 群に分けた。地域志向性を目的変数、体験学習 13 項目の有無および交絡因子として性別・出身地・選択実習先を加えた計 16 項目を説明変数として、多変量解析を行った。</p> <p><b>結果</b> 体験学習の中で巡回診療と地域志向性に有意な関連がみられた。</p> <p><b>考察</b> 巡回診療は地域の集会所に医師が赴いて診療を行うもので、医療過疎地では在宅訪問に比べて患者、医療者の双方にとってより効率的なケアが提供できる。同体験学習を通して、特に過疎地域の医療問題を認識したことが医学生の地域志向性を高めたと考えられる。</p> <p><b>結論</b> 地域医療実習における巡回診療の体験学習は医学生の地域志向性を高める。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第340号	氏名	伊藤 寛
<p>[論文題名] Bi-directional regulation between NDRG1 and GSK3<math>\beta</math> controls tumor growth and is targeted by differentiation inducing factor-1 in glioblastoma.</p> <p>雑誌名, 巻(号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Cancer research. Epub ahead of print.</p> <p>著者名 伊藤寛、渡公佑、柴田智博、宮本智文、村上雄一、中原由紀子、和泉弘人、脇本浩明、桑野信彦、阿部竜也、小野眞弓</p> <p>[要 旨] [目的]膠芽腫の有効な治療の開発には、生存/増殖を制御する中心的な分子経路の解明が必要である。NDRG1 発現は神経膠腫や様々ながんで良好な予後に相関するが、詳細な機序は不明である。本研究は NDRG1 が膠芽腫の予後に関わる機序を解明し、NDRG1 を標的とした新たな治療創出を目的とした。 [方法]免疫染色で患者腫瘍の NDRG1 発現を解析した。膠芽腫細胞の NDRG1 発現を変化させ、増殖、細胞周期、シグナル活性をフローサイトメトリ、イムノブロットで解析した。DIF-1 の NDRG1 誘導効果を検証し、体内動態を HPLC・GC/MS で、抗腫瘍効果を膠芽腫移植マウスで検証した。 [結果]①NDRG1 発現は患者予後に正に相関した。②NDRG1 抑制は膠芽腫細胞増殖を亢進し、GSK3<math>\beta</math>、AKT/S6 活性を促進した。この効果は GSK3<math>\beta</math> 阻害剤で相殺された。③ NDRG1 過剰発現は GSK3<math>\beta</math>、AKT/S6 活性や細胞周期進行、増殖を抑制した。④NDRG1 は GSK3<math>\beta</math> の、GSK3<math>\beta</math> によるリン酸化は NDRG1 の安定性を低下させた。⑤DIF-1 は NDRG1 発現を誘導し、同所移植腫瘍の増殖を抑制した。 [考察・結論]NDRG1 は GSK3<math>\beta</math> を介し、生存/増殖や細胞周期に関わるシグナルを抑制し、膠芽腫細胞の増殖を抑制する。DIF-1 は血液脳関門を通過可能であり、DIF-1 を用いた NDRG1 標的は新たな有効な膠芽腫治療になり得る。(600/600 字)</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第341号	氏名	千原敦子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Differences in lipid metabolism between anagliptin and sitagliptin in patients with type 2 diabetes on statin therapy: a secondary analysis of the REASON trial.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Cardiovascular Diabetology. 18(1):158, 2019</p> <p>著者名 Atsuko Chihara, Atsushi Tanaka, Takeshi Morimoto, Mio Sakuma, Michio Shimabukuro, Takashi Nomiyama, Osamu Arasaki, Shinichiro Ueda, Koichi Node.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> スタチン投与下の2型糖尿病患者において、DPP-4阻害薬アナグリプチンとシタグリプチンのLDL-C低下作用を比較したREASON研究では、アナグリプチンの有意なLDL-C低下作用が示された。しかしその詳細な機序や、他の脂質代謝マーカーとの関連は明らかではない。本研究では、主研究の副次評価項目である脂質代謝マーカーの変化を解析することにより、アナグリプチンのLDL-C低下作用の機序を解明することを目的としている。</p> <p><b>【方法】</b> 対象は、スタチン投与下にてLDL-C管理目標値が未達成の心血管疾患ハイリスク2型糖尿病患者353例(68歳±10歳、LDL-C 111±22mg/dL)。アナグリプチン投与群とシタグリプチン投与群に割付け後、登録時と投与52週後の脂質代謝マーカーの変化量を2群間で比較した。</p> <p><b>【結果】</b> コレステロール吸収マーカーの変化量に2群間で有意な差は認められなかった一方で、コレステロール合成マーカーであるラトステロールはシタグリプチン投与群で有意に上昇し(変化量 0.15±0.84µg/mL, P=0.024)、アナグリプチン群では有意な変化が認められなかった(変化量 0.00±0.56µg/mL, P=0.989; 群間差 P=0.064)。</p> <p><b>【考察】</b> アナグリプチンによるLDL-C低下作用の機序として、肝におけるコレステロール合成抑制が関与している可能性が示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 342 号	氏 名	國武 裕
<p>[ 論文題名 ] Serum oxytocin levels and logical memory in older people in rural Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Geriatric Psychiatry and Neurology, 2020 Apr 1:891988720915526. doi: 10.1177/0891988720915526. [Epub ahead of print]</p> <p>著者名 Yutaka Kunitake, M.D., Yoshiomi Imamura, M.A., Yoshito Mizoguchi, M.D., Ph.D., Jun Matsushima, Ph.D., Hiroshi Tateishi, M.D., Toru Murakawa- Hirachi, M.D., Hiromi Nabeta, Ph.D., Toshiro Kawashima, M.D., Ph.D., Naoki Kojima, M.D., Ph.D., Shigeto Yamada, M.D., Ph.D., Akira Monji, M.D., Ph.D.</p> <p>[ 要 旨 ] 【研究の目的】 本研究の目的は、日本の農村部在住の高齢者（65 歳以上）の血清オキシトシンと論理記憶との関連を調査することである。</p> <p>【方法】 本研究は横断研究であり、2009 年 10 月から 2011 年 3 月にかけて調査を行った。最終サンプル数は 385 人で、平均年齢と標準偏差は 75.7±6.76 歳（男性 144 人、平均 75.0±6.48 歳、女性 241 人、平均 76.2±6.91 歳）であった。参加者は、認知症の有病率調査のためのスクリーニング検査を受けた。WMSR 論理記憶Ⅱ遅延想起（LMⅡ-DR）を使用して論理記憶を評価した。血清オキシトシン値は酵素免疫測定法を用いて得られた。</p> <p>【結果】 日本の農村部在住者の血清オキシトシン値は男性（0.05 ± 0.036 ng/mL）よりも女性（0.12 ± 0.127 ng/mL）が有意に高かった。（<math>P &lt; 0.001</math>）また、回帰分析では血清オキシトシン値と性別（女性）（<math>P &lt; 0.001</math>）と WMSR 論理記憶Ⅱ遅延想起との間に正の相関を示した。（<math>P = 0.038</math>）</p> <p>【考察】 高齢の男性と女性のオキシトシンと論理的記憶の相関の違いは、高齢の男性と女性ではオキシトシンの働きが異なるという最近の研究と一致している。</p> <p>【結論】 現在の結果は、日本の農村部在住の高齢女性の血清オキシトシン値が男性よりも高いことを明らかにし、高齢女性のオキシトシン値と論理記憶の間には正の相関がある可能性を示唆した。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 343 号	氏 名	前田和政
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Risk Factors of Neuropathic Pain after Total Hip Arthroplasty</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Hip Pelvis 30(4): 226-232, 2018</b></p> <p>著者名  <b>Kazumasa Maeda, MD, Motoki Sonohata, MD, PhD, Masaru Kitajima, MD, PhD, Shunsuke Kawano, MD, PhD, Masaaki Mawatari, MD, PhD</b></p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>変形性関節症による痛みは、主には侵害受容性疼痛であるが、この痛みの一部は神経障害性疼痛 (NP) によるものとも考えられています。PainDETECT アンケートで診断された NP 患者における人工股関節全置換術 (THA) の効果を調査した。163 股関節 (患者 161 人) を調査した。全ての患者は、NP の経験に基づいて PainDETECT アンケートに記入し、THA の前後に日本整形外科学会 (JOA) の股関節スコアを使用して臨床スコアが評価されました。</p> <p>THA 前に 24.5% の患者が NP と診断された。5.5% は、THA の 2 ヶ月後に NP と診断された。THA 前では、PainDETECT スコアと X 線写真の重症度との間に有意な相関はなかったが、PainDETECT スコアと JOA スコアの間には有意な相関を認めた。THA 後 2 か月後の NP は、THA 後 1 週間の疼痛スコアと有意な相関はなかった。ただし、THA 後 2 ヶ月で術前疼痛スコアと NP の間に有意な相関を認めた。</p> <p>THA は、変形性股関節症患者の侵害受容性疼痛の緩和および NP の緩和に有用であった。術前の痛みは、THA 後の NP の危険因子であった。術前の痛みを抑えることは、術後の NP を減らすのに効果的かもしれない。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 344 号	氏 名	溝上 泰一朗
<p>[ 論文題名 ] Aspiration catheter reach to thrombus (ART) sign in combined technique for mechanical thrombectomy: Impact for first-pass complete reperfusion</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases, Vol. 28, No. 10, 104301, 2019</p> <p>著者名 Taichiro Mizokami, Takeshi Uwatoko, Kenichi Matsumoto, Yuichiro Ooya, Go Hashimoto, Motofumi Koguchi, Hideki Iwashita, Kiku Uwatoko, Hiroshi Takashima, Hiroshi Sugimori, Syuji Sakata</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的) 急性期血栓回収療法の Aspiration Catheter (AC)と Stent Retriever(SR)を併用する Combined Technique において、初回完全再開通(first -pass complete reperfusion: FPR) を得るための要因は不明である。我々は、デバイス抜去前に、吸引カテーテルが血栓に到達し血栓を捕獲することが、FPR には重要と考えた。吸引ポンプの逆血停止と吸引カテーテル先端のステントの形状変化により判断し、AC が血栓に到達した兆候を ART(Aspiration Catheter reached to Thrombus) sign と定義した。この研究の目的は、Combined technique における ART sign の影響を明らかにする事である。</p> <p>方法) 2015 年 1 月から 2018 年 9 月の期間に、前方循環の急性期脳梗塞に対して、初回手技に AC と SR を併用し血栓回収療法を行った連続症例を対象とした。初回手技において、ART sign を認めた群(ARTs 群) と認められなかった群(Non-ARTs 群) に分類した。主要評価項目は、初回手技の完全再開通(modified thrombolysis in cerebral infarction mTICI 3)とした。</p> <p>結果) 66 例が対象となった。ARTs 群は 38 例で Non-ARTs 群は 28 例であった。両群は TICI2b/3 では差がないものの (97.3% VS 89.2%, p=0.3), FPR と TICI 3 は ARTs 群で高率に得られた。(81.5% VS 14.2%, p&lt;0.001; and 89.4% VS 32.1%, p&lt;0.001, respectively).</p> <p>考察) AC が血栓まで到達することができれば、SR と併用する事で血栓を一塊で回収することができ、FPR に寄与したと考えられた。</p> <p>結論) Combined technique における ART sing は、FPR を得る重要な要因である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第345号	氏名	立石 洋
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Changes in interleukin-1 beta induced by rTMS are significantly correlated with partial improvement of cognitive dysfunction in treatment-resistant depression: a pilot study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Psychiatry Research, 2020. doi: 10.1016/j.psychres.2020.112995. [Epub ahead of print] PMID: 32371273</p> <p>著者名 <u>Hiroshi Tateishi</u>, Yoshito Mizoguchi, Atsushi Kawaguchi, Yoshiomi Imamura, Jun Matsushima, Hiroko Kunitake, Toru Murakawa, Yoshinori Haraguchi, Yutaka Kunitake, Toshihiko Maekawa, Takahiro A Kato, Toyoko Asami, Akira Monji</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的: うつ病は認知機能障害と密接な関係があり、反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) は治療抵抗性うつ病 (TRD) の認知機能障害を改善する非侵襲的な治療法である。また、うつ病の病態生理は神経炎症と関連していると言われている。今回、TRD において rTMS 治療前後で認知機能の変化と炎症性サイトカインの変化との間に関連があるかどうかを調べた。</p> <p>方法: 単群比較の非盲検試験である。2015年7月から2018年2月までのTRD患者11人を対象とし、当科入院下で10Hzの刺激頻度でrTMSを6週間行った。rTMS治療前後で認知機能、抑うつ症状、炎症性サイトカインの血清濃度 (インターロイキン (IL) -1<math>\beta</math>、IL-6、tumor necrosis factor (TNF) -<math>\alpha</math>) を測定した。認知機能障害、抑うつ症状、炎症性サイトカインに関する単群比較ではrTMS治療前後で対応のあるt検定を、相関解析では、ボンフェローニの補正を行った。</p> <p>結果:rTMS治療により治療前後で抑うつ症状及び認知機能障害の一部が有意に改善した。また、rTMS治療前後でIL-1<math>\beta</math>、IL-6、TNF-<math>\alpha</math>単独では有意な変化を認めなかったが、一部の認知機能障害の改善とIL-1<math>\beta</math>の低下が有意に相関した。</p> <p>考察: 今回の研究においてrTMSによる認知機能障害の部分的な改善は血清IL-1<math>\beta</math>の低下に関連している可能性が考えられる。</p> <p>結論: 反復経頭蓋磁気刺激による治療抵抗性うつ病におけるIL-1<math>\beta</math>の低下は認知機能障害の部分的な改善と有意に相関する可能性が考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。



# 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第346号	氏名	鈴山 耕平
<p>[ 論文題名 ] Total small vessel disease score and cerebro-cardiovascular events in healthy adults: The Kashima scan study.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Int J Stroke. 2020 Feb 19:1747493020908144. doi: 10.1177/1747493020908144.</p> <p>著者名 鈴山耕平, 薬師寺祐介, 緒方敦之, 江里口誠, 川口淳, 野口智幸, 中島順子, 原英夫</p> <p>[ 要 旨 ] 【研究の目的】頭部MRIのTotal small vessel disease(SVD) scoreは脳の微小血管障害を包括的に評価するとされる。本研究では健常成人においてベースラインのTotal SVD scoreと将来の脳心血管イベントの関連性を検討する。 【方法】脳ドッグを受診した健常成人1349名(平均年齢57.7歳, 男性47%)を対象とした前向き研究である。頭部MRIでlacunae, cerebral microbleeds, white matter changes, and basal ganglia perivascular spacesから, Total SVD score (0-4)を評価した。参加者を3群(Total SVD score 0, 1, 2-4)に分け, 脳心血管イベントのリスクを群間比較した。 【結果】平均6.7年の観察期間に35例で脳心血管イベントを認めた。COX回帰分析ではTotal SVD scoreが脳心血管イベントに関連することが示された(HR 2.17; 95%CI, 1.36- 3.46; p=0.001)。 【考察】Total SVD scoreが脳血管障害だけでなく, その他の心血管イベントの予測因子となった。これは全身の血管の内皮障害や炎症を反映している可能性がある。 【結論】健常成人におけるTotal SVD scoreは将来の脳心血管イベントの有効な予測因子である。</p>			

- 備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。  
2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 347 号	氏 名	江橋 諒
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Significance of simulated conventional images on dual energy CT after endovascular treatment for ischemic stroke</p> <p>Journal of Neurointerventional Surgery, 11(9), 898-902, 2019</p> <p>Ryo Ebashi, Atsushi Ogata, Masashi Nishihara, Kohei Inoue, Fumitaka Yoshioka, Yukinori Takase, Jun Masuoka, Yusuke Yakushiji, Hiroyuki Irie, Hideo Hara, Tatsuya Abe</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>研究の目的：</b>血栓回収術直後の頭部 CT では、出血、あるいは梗塞巣の血液脳関門の破綻による造影剤漏出により、脳実質内に高吸収病変が出現することがある。Dual Energy CT (DE-CT) で識別された造影剤漏出は、遅発性出血や転帰不良と相関する。しかしながら、その定量的指標は明らかではない。本研究の目的は、術後の遅発性出血を予測し得る指標を明らかにすることである。</p> <p><b>方法：</b>急性期脳梗塞に対して血栓回収術を施行した 52 例を対象とし、後方視的に検討した。DE-CT から得られる仮想標準 CT 画像 (sCCT) を用いて、治療直後の梗塞巣内の最大 HU 値 (Lesion HU) を測定した。術直後の仮想非造影 CT 画像 (VNC) で術直後出血の有無を判定した。また、術翌日に、空間占拠性病変を有する新規出血、あるいは出血増大を認めたものを delayed PH と定義した。Lesion HU と術直後出血、及び delayed PH との相関をみた。</p> <p><b>結果：</b> Lesion HU は術直後出血群で有意に高かった (377.9±385 HU vs 83.5±37.9 HU; p&lt;0.0001)。cut off 値は 80 HU で、感度は 100%、特異度は 63%であった (p=0.0001, AUC=0.89)。また、Lesion HU は delayed PH 群で有意に高かった (250.8±382.2 HU vs 93.7±64.8 HU; p=0.01)。cut off 値は 78 HU で、感度は 100%、特異度は 61%であった (p=0.049, AUC=0.76)。</p> <p><b>考察：</b>術直後の Lesion HU は術直後出血や遅発性出血、出血増大に対して高い感度を有するため、術後の血圧管理や抗血栓療法開始を検討する上で有用な指標となり得る。</p> <p><b>結論：</b>術直後の sCCT における梗塞巣内の最大 HU 値は、術後の出血の有無、あるいは遅発性出血や出血増大を予測できる可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第348号	氏名	山下 友子
<p>[ 論文題名 ]  Early prophylaxis of central venous catheter-related thrombosis using 1% chlorhexidine gluconate and chlorhexidine-gel-impregnated dressings: a retrospective cohort study.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  Scientific Reports, 10, 15952, doi: <a href="https://doi.org/10.1038/s41598-020-72709-w">10.1038/s41598-020-72709-w</a>, 2020</p> <p>著者名  Yamashita T, Takamori A, Nakagawachi A, Tanigawa Y, Hamada Y, Aoki Y, Sakaguchi Y.  (山下友子、高守史子、中川内章、谷川義則、濱田洋平、青木洋介、坂口嘉郎)</p> <p>[ 要 旨 ]  目的: 本研究の目的は、カテーテル関連血流感染症の予防に効果がある、1%クロルヘキシジンアルコールとクロルヘキシジンドレッシング (CGCD) を使用する事で、カテーテル関連血栓症 (catheter related thrombosis, CRT) が減少するかを調べる事である。  方法: 本研究は 2009 年～2014 年に佐賀大学病院集中治療室にて、48 時間以上内頸静脈に留置された 12 ゲージの中心静脈カテーテルによる治療が必要であった患者を対象として行った。CGCD を使用した患者群と 10%ポビドンヨードと通常透明ドレッシング (PITD) を使用した患者群で、超音波検査で判定した CRT の発症率を比較した。CRT は 7 日以内に発生した early-CRT と 8～14 日に発生した late-CRT に分類した。ロジスティック回帰モデルを用いた多変量解析を行い、early-CRT 及び late-CRT と、皮膚消毒薬とドレッシング材の組み合わせの関係について解析した。  結果: CRT は 74/134 人に認め、52 例の early-CRT と 22 例の late-CRT を含んだ。CGCD 群では、PITD 群と比較して、early-CRT の発症率が有意に低下した (odds ratio = 0.18, <math>p &lt; .001</math>)。late-CRT については、2 群間で CRT の発症率に差はなかった。  考察: CGCD が early-CRT を減少させた理由は、クロルヘキシジンの抗菌効果と抗血栓効果によると推測された。  結論: 重症患者において、CGCD を使用する事で、7 日以内の CRT の発症リスクが低下する可能性が示された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第349号	氏名	兒玉 和久
-------------	-------	----	-------

[ 論文題名 ]  
**Construction of a Heart Failure Database Collating Administrative Claims Data and Electronic Medical Record Data to Evaluate Risk Factors for In-Hospital Death and Prolonged Hospitalization.**

雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  
**Circulation Reports 2019; 1: 582-592**

著者名  
 兒玉和久 坂本知浩 久保田徹 滝村英幸 本郷玄 近島博道 柴崎佳幸 矢田徹  
 野出孝一 中山建夫 中尾浩一

[ 要 旨 ]

**[目的]**  
 心不全は入院長期化や院内死亡率が高いことが問題となる。DPC やレセプトデータを用いた臨床研究が注目されているが、対象患者の選択や研究に必要な不可欠なデータの欠損など問題も多い。

**[方法]**  
 国内急性期3病院でのDPCおよび電子カルテデータを突合させ、定義を設定することにより心不全データベースを作成した。このデータベースを利用し、3病院に入院した心不全患者の臨床的特徴と入院初期に得られたデータを用いた長期入院と院内死亡に寄与する要因を検討した。

**[結果]**  
 入院患者延べ数は2750名。平均年齢は77.0±13.0歳。55.3% (n = 1,520)は男性で、39.1% (n = 759)は左心室駆出率が40%未満であった。院内死亡率は6.0% (n = 164)であり、生存退院患者の平均滞在日数は18.2±13.7日 (中央値15日)だった。院内死亡に寄与する要因は、高齢、入院時NYHAクラスが高いこと、アルブミン低値および低ナトリウム、クレアチニン高値およびCRP高値だった。

**[考察]**  
 この手法により心不全評価に必要なバイタルサイン、血液・画像検査所見を含むデータベースを、DPCを用いて構築することが可能になった。入院長期化や院内死亡に寄与する因子は、既知のものと概ね一致していた。

**[結論]**  
 DPC および電子カルテデータを突合せることにより、心不全入院患者のデータベースを構築した。この手法は比較的容易に施設ごとのデータベース構築に役立ち、心不全患者の入院管理や臨床パラメーターの評価に役立つ。

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・㉔	第 350 号	氏 名	徳島 圭宜
<p>[ 論文題名 ]  Management of hepatitis B surface antigen and hepatitis C antibody-positive patients by departments not specializing in hepatology at a suburban university hospital in Japan: A single-center observational study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  International Journal of General Medicine, 13, 743-750, 2020</p> <p>著者名  Yoshinori Tokushima, Masaki Tago, Midori Tokushima, Naoko E. Katsuki, Shinji Iwane, Yuichiro Eguchi, Shu-ichi Yamashita</p> <p>[ 要 旨 ]  【研究の目的】  2010~2015 年のウイルス性肝炎診療に関わる助成制度や治療薬の発展が、非肝臓内科の診療行動に及ぼした影響を明らかにする。</p> <p>【方法】  2015 年に当院の非肝臓内科で HBs 抗原陽性あるいは HCV 抗体中力価以上が判明した患者を後ろ向きに調査し、肝臓内科への紹介の有無で 2 群に分け解析した。また肝臓内科への紹介率を 2010 年の当院の先行研究結果と比較した。有意水準は <math>p &lt; 0.05</math> とした。</p> <p>【結果】  HBs 抗原陽性者は 82 例、紹介率は 35.4%であり、2010 年 (先行文献) の紹介率 20.6%より高かった。多変量解析では内科、血小板数、<math>\gamma</math>-GTP が紹介群で有意に高かった。HCV 抗体中力価以上の症例は 279 例、紹介率は 11.8%であり、2010 年 (先行文献) の紹介率 18.7%より低かった。多変量解析では測定診療科が内科である割合が紹介群で有意に高かった。</p> <p>【考察】  HBs 抗原陽性者の紹介率の改善には、ガイドラインの発行によって de novo 肝炎が認知されたことが、HCV 抗体中力価以上の患者の紹介率の減少には、治療経験者の増加と最新の治療の副作用と治療適応に関する知識が非肝臓内科に浸透していないことが影響している可能性がある。非肝臓内科医、特に非内科医の紹介率を向上させるために、アラートシステムの導入などが期待される。</p> <p>【結論】  HBs 抗原陽性者の紹介率は改善し、HCV 抗体中力価以上の患者の紹介率は低下していた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 351 号	氏 名	山田 康貴
<p>[ 論文題名 ]  Predictors of short-term thrombocytopenia after transcatheter aortic valve implantation: a retrospective study at a single Japanese center</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  BMC Research Notes, 13, 2020</p> <p>著者名  山田康貴、三浦大介、高守史子、野上英次郎、柚木純二、坂口嘉郎</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> 経カテーテル的大動脈弁留置術 (Transcatheter Aortic Valve Implantation: TAVI) 後の血小板減少は、予後を予測するうえで重要な因子といわれている。しかし、術後血小板減少をきたす因子については十分な知見が得られていない。本研究の目的は TAVI 術後の血小板減少に関連する因子について検討することである。</p> <p><b>【方法】</b> 2014 年 3 月から 2019 年 8 月までに当院で行われた TF-TAVI131 例を対象とした。術前の 50%以上の血小板減少 (drop platelet count: DPC) をきたした血小板減少群 (DP 群) と 50%未満の非減少群 (NDP 群) において患者背景、術中所見、術後経過から関連する因子を調査した。</p> <p><b>【結果】</b> DP 群が 74 例(56%)で NDP 群が 57 例 (44%) であった。DPC<math>\geq</math>50%に寄与する因子は、単変量解析では高齢、低 BMI、バルーン拡張型弁 (ballon-expandable valve: BEV) の使用症例であった。多変量解析では DPC<math>\geq</math>50%に寄与する因子は低 BMI (オッズ比: 0.884、95%信頼区間: 0.785-0.997、<math>p=0.039</math>) と BEV の使用(オッズ比: 3.014、95%信頼区間: 1.003-9.056、<math>p=0.045</math>) であった。</p> <p><b>【考察】</b> 本研究の結果により低 BMI と BEV の使用が TAVI 後の血小板減少のリスクである可能性が示唆された。低 BMI の患者に BEV を使用する場合は TAVI 後の血小板の推移に注意する必要がある。</p> <p><b>【結論】</b> 低 BMI と BEV の使用は TAVI 後の血小板減少のリスクである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。